

『メノン』編における不知と初期対話編

伊集院 利 明

ソクラテスの不知の表明と知の表明との間の整合性の問題——ヴラストスによって口火が切られて以来さかんに論じられて来たこの問題は、一向に解決の兆しを見せない。プラトンの初期対話編において、ソクラテスは、倫理的問題に関して極めて断定的な形で不知を表明する一方で、幾つかの倫理的命題に関して知を表明している。

今日学界において、ソクラテスが否認する「知」(以下「知¹」とする)とソクラテスが所有すると断言する「知」(以下「知²」とする)との意味が異なること、「知¹」を厳密な意味での知とすれば、「知²」が何らかの形で緩い意味での知であることについては、ほぼ同意が形成されていると言ってよいであろう。一方で、知¹、知²のそれぞれの内実および両者の関係が正確にどのようなものであるかについての同意の形成は、得られていない。しかし、この知¹、知²の内実を明らかにすることなしには、初期対話編におけるソクラテスの知のあり方、知識観を十分に説明することは不可能である。

『メノン』編を主題とする本論文の目論みは、『メノン』編の方法

論の分析から初期対話編の知識観を照射し、そのことによって、知²の内実を明らかにするための重要な足場を築くことである。そのことは同時に、『メノン』編において解決の与えられている「ソクラテスの誤謬」の初期対話編における位置づけ、意義を明らかにすることにもなるであろう。

この目論みは、あるいは奇妙に聞こえるかもしれない。というのも、『メノン』編は初期対話編ではなく、むしろ初期と中期との間の移行期に属するものであるからである。しかし、ヴラストス⁽²⁾が初期の知識観と『メノン』編における知識観との間の断層を主張したものの、両者の間の連続性を主張する解釈者⁽³⁾の方が今日優勢であると言えると思われる。ソクラテスの、侍童との数学の主題による問答での想起説の例示(82b-86c)は、従来から論駁法による問答のあり方を例示するものであることが主張されてきた⁽⁴⁾。ソクラテスは、侍童の想念pを、侍童自身の想念q、rから非pを導出することにより論駁し、改善させる(82e-84a, 84d-85b)。真なる想念sを持

たない者の想念^q、^rから論理必然的に^sが帰結するという構造は、また、「何が真である時に何が真であるか」の探究を主題とする仮設法の提示、叙述(89b)において明らかに継承されていると見なすことができる。このように『メノン』編が初期の方法論を継承しているとすれば、『メノン』において明確な方法論的反省が行われている以上、我々は初期対話編には見られないような論駁法の構造、知の概念についての洞察を『メノン』編から得ることを期待出来るのである。

本論文での考察にあたつて、我々は特に次の点に着目したい。それは、『メノン』編においてはソクラテスが倫理的問題に関して決して知を表明することはなく、専ら不知を表明している (eg. 71b, 80c-c) という事実である。この『メノン』編の不知の表明は、明らかに初期対話編におけるソクラテスの不知の立場を継承している。『メノン』編においてソクラテスが「知」を二つの異なった意味に用いているという示唆を、我々は『メノン』編において何ら見いだすことができない。⁽⁵⁾ それゆえ、『メノン』編の方法論は知¹を目指すものであると考えざるを得ない。このことが従来の知¹、知²の解釈の重要な問題点を浮き彫りにすること、そして、知¹を目指す探究において「ソクラテスの誤謬」が避けられないものであることを、以下の論述で明らかにしていきたい。

一

『メノン』編の方法論が対象としているのがソクラテスが所有し

ていない知である¹ということは、一つの重大な問題を投げかける。もし『メノン』編の方法論が論駁法の構造の分析であるとすれば、ソクラテスは論駁法の目指す完全に整合化された想念の体系を得ることが出来ていないことになる。論駁法は、諸想念相互の論理的な関係を明確にし、矛盾する諸想念の間の選択を迫ることによって、想念の整合化、体系化をしていくものだからである。しかし、研究者の間では周知のように、これは知¹、知の問題に関して權威的存在であるヴラストスの見解(すなわち、自らの持つ想念群の整合性によりソクラテスが知²を主張し得たとする見解⁽⁶⁾)に真っ向から対立するものである。そもそも論駁法によってソクラテスが想念を整合化し尽くすことが出来ないとすれば、矛盾する想念をかかえたソクラテスは、いかに知²を主張し、対話相手に対して優位に立ち得たのであろうか。このことは、移行期において、ソクラテスの知識観が論駁法に基づく初期の知識観から別のものへと変遷したことを、示すものなのであろうか。

こうした問題にもかかわらず、『メノン』編の知識観、方法論が、初期の論駁法との間に強い連続性を持つものであり、その構造を分析するものであると考えることには、十分な論拠がある。『メノン』編において想起説の叙述は、文脈上明らかに論駁法による探究の正当化のために行われている。ソクラテスが想起説の叙述を導入するのは、論駁法の方法による探究の続行の正当性をメノンに納得させるためであり (80d1-81d esp. 80d1-4)、想起説の叙述の後にもソクラテスはそれ以前のやり方による探究の続行を主張し続ける

(86c4-6)⁽⁷⁾。仮設法を用いての探究も、相手の自発的同意に基づいて想念q、rを引き出し(87d2-4, 87e5-89a2)、そこからsが必然的に帰結することを示すという形で行われる。そこにおいて徳が善きものであるということの同意が重要な拠りどころとされていること(87d2-4)も、初期対話編におけるソクラテスの常套の論法を継承するものである。たとえ仮設法が対話相手の想念を出発点とするという方針なしに用い得るものであるとしても、『メノン』編における仮設法の意義を正確に捉えるためには、我々はそれの『メノン』編の議論のうちにおける使用の実際の姿に注目しなければならないのである⁽⁸⁾。そして、「理由の思考」(aitias logismos 96a3-4)も、侍童との問答によって例示されたこと、すなわち、真なる想念を得るために行われた論駁法の手続きをそのまま続行することに他ならない(98a3-5, 95c10-d1)。すなわちそれは、諸想念の間の論理的関係を明確にしつつ、矛盾する想念の間の選択をし、想念の体系化をはかり、ある想念がなぜ正しいかについての説明を組み立てることに他ならないのである。

『メノン』編の方法論が論駁法の構造を分析するものであるとすると、我々は、論駁法を目指す整合化された想念の体系の獲得がソクラテスにとって不可能なほどに困難であると考えたことの理由があるのであろうか。

このことについて我々は、論駁法がその構造上、単に当面の主題となっている事柄に直接に関連する想念だけではなく、その人の想念の全体を問題にするものであるということに着目する必要がある。

ある事柄についての想念が他の事柄とその事柄との関連についての想念を含むものである以上、原理的に、倫理的問題領域のうちの、ある事柄に関連する想念と関連しない想念との間の境界は引き得ない。『メノン』編には、プラトンがこのことを明確に自覚していたことの有力な示唆がある。プラトンは、論駁法による対話においてAは「BのC」であるといった定義を下すとき、B、Cについて対話者の間での意見の一致が必要であることを明確に主題化する(95c-6)。B、CのそれぞれについてAと同様のことが成り立ち、この過程が際限なく続くということの洞察へ、この定式化はあと一步のところまで迫っている⁽⁹⁾。このように、論駁法においてその人の持っている想念の全体の整合化が要求されるとすれば、そうした整合化の達成が極めて困難であると考えたことはごく自然なことである。

我々が、ひとたびこのことを洞察した上で、初期および移行期の対話編を見直すならば、我々は容易に次の事実⁽¹⁰⁾に気づくことになる。それは、そもそも、ソクラテスの想念の体系が、ソクラテス自身が自覚している範囲においてさえも決して完全に整合化されているのではなく、初期対話編においても移行期の対話編においても、ソクラテスが矛盾する想念のうちのいずれを選択するべきかということを決断し得ないという場面が度々出現するということである⁽¹⁰⁾。

『メノン』編において、ソクラテスはアテナイにおいて善き人々がいるということについて同意を与える(93a2-6)。この同意は、後の議論において、徳とは真なる想念にすぎないという帰結を生じさ

せる (96b-99e) が、明らかにソクラテスはこの帰結を歓迎していない (cf. 99c-100b)。『ヒピアス (小)』編においてソクラテスは、そこで主題となっている問題についての自分の考えの動揺を正直に告白する (372d-e, 376b-c)⁽¹¹⁾。『ラケス』編においても、ソクラテスは他の対話相手と同様にアポリアにおちいる (200e25)⁽¹²⁾。このことは、この対話編でのニキアスとの問答を通じて、ソクラテスが自分の二つの信念 (勇氣が徳の一部分であるという信念と、善悪の知が徳の全体であるという信念 (190c8-d5, 198a, 199d4-e1)⁽¹³⁾) の間の調停ないしは選択を出来ないことが明らかになったことを示すものに他ならない。⁽¹⁴⁾『ゴルギアス』編においてソクラテスは、カリクレスに対して決定的な勝利を収めた後においてさえも、自分たち (ソクラテスとカリクレス) がいつも同じ考えを持つことがないと語る (527d5-e1)。この言葉を皮肉などとして理解するべきではないということは、以上の証拠、すなわち、初期と移行期の対話編の様々な箇所においてソクラテスの信念の混乱が見られるという事実から、明らかである。以上のことに関連して、もう一つ付け加えておきたい重要な点がある。それは、もしソクラテスが自分自身の信念の矛盾を自覚していないとすると、ソクラテスがいかにして不知 (不知)¹ の自覚に至ったのかが理解しにくいものになってしまうということである。『弁明』における有名なパッセージに注目されたい。ソクラテスは、政治に携わっている或る人を論駁した後に、善美なる事柄を彼も自分も知らない、しかし自分は知らないと自覚していると語る (21d3-6)。ソクラテスとソクラテスが反駁した相手が同

じ意味において「知らない」のだとすれば、ソクラテスが彼の反駁した相手と同様、論駁法の吟味に耐え得ないことは明らかである。⁽¹⁶⁾ソクラテスが自分の信念のうちに矛盾があることを自覚しているとすれば、我々は、上に挙げた初期対話編における様々な箇所とソクラテスの不知の自覚の成立を、合理的な形で理解することが可能となるのである。

本節のこれまでの考察から、『メノン』編の方法論で分析されているのが、論駁法によって人の持つ全ての信念を整合化、体系化していく途であること、完全に整合化された信念の体系としての知¹をソクラテスが得ているわけではなく、ソクラテスが自己の信念のうちの矛盾を自覚していること、『メノン』編の知の分析が初期対話編におけるソクラテスの知¹および論駁法との関係に符合するものであること、以上の論点の強力な裏づけが得られたと言える。

二

前節の知の解釈は、初期対話編における知の内実、および、知と知との関係についても新たな光を投げかける。そのことを示す前に、前節の知の解釈の論拠を補強し、その意義をより明らかにするため、その解釈によって、『メノン』編において「ソクラテスの誤謬」⁽¹⁷⁾ (71d3-4) がいかに解決されるかということ、および、初期対話編におけるその位置づけが、はじめて明確になることを明らかにしておきたい。

知¹が完全に整合化、体系化された信念の全体を意味するとすれば、

「xが何であるかを知らねば、xがどのようなものであるかも、何がxの事例であるかも知ることができない」という所謂「ソクラテスの誤謬」、何であるかの知の優先性の格率が決して「誤謬」ではないことは明らかである。『メノン』編において「知」が「知」の意味で用いられている以上、『メノン』編における「ソクラテスの誤謬」は「xが何であるかを知らなければ、xがどのようなものであるかも、何がxの事例であるかも知ることが出来ない」と読める。しかし、知が完全に整合化された想念の全体系であるとすれば、ひとが、xがどのようなものであるか、何がxの事例であるかを、他の想念との間の論理的な関係から体系的な形で説明し、正当化することが出来る段階においては、xが何であるかについてもそれと全く同じことが出来ているはずであるからである。しかも、次のことを考えれば、「ソクラテスの誤謬」が、何であるかの知とその他の知との同時性ではなく、前者の優先性として定式化されているということの理由を洞察することは容易である。それは、そのような完全な体系が構築された際に、xがどのようなものであるか等についての説明はxが何であるかということを出発点として組み立てられるべきであると考えることが、極めて自然であるということである。こうした考えが極めて自然であり、しかもそのことの裏づけがアリストテレスの『分析論後書』の定義論からも得られるにせよ、その正当性を疑う余地はあるかもしれない。しかし、今我々はそれについて考察する必要は全くない。いずれにしても、プラトンが移行期において両者の関係についてのこうした考えの正当性を確信してい

たことは、テキスト上明白であるからである (Gorg. 463c)。

このように考えるとき我々は、「ソクラテスの誤謬」の問題がそもそも論駁法の構造に内在するものであるということに洞察することが出来る。しばしば研究者の間で、論駁法について、そもそも事例についての知がなければ探求が出発点を持ち得ず、成立し得ないこと、それゆえ、ソクラテスが「ソクラテスの誤謬」を信じていたと考えることが不合理であるということが、主張される⁽¹⁹⁾。しかし、ある事例がxの事例であるという想念が、それが事例についての想念であるがゆえにxについての他の想念に比して特権的位置を持つということとは、論駁法においてその構造上決してあり得ることではない。論駁法は、事例についての想念を含む想念の全体の整合性の構築を、事例についての想念と他の想念とを同等に扱った上で、目指すものだからである。事例の問題についての『メノン』編におけるプラトンの立場は、初期に比べて確固としたものである。『メノン』編においてアニュトスとの対話で、ソクラテスの、アテナイにおいて善く立派な、徳を持った人々がいると思うという安易な同意(93a)が探求の混乱の極めて重要な原因となっている。その同意がなければ、「徳とは真なる想念にすぎない」という帰結は生じ得ない。ソクラテスは、こうした混乱した議論を、何であるかの知の優先性の格率を守るべきであったことを強調して締めくくる(100b4-6)ことによって、こうした混乱の原因を自分が自覚していることを極めて強く示唆する。我々はここに、『ラケス』編⁽²⁰⁾などの初期対話編における事例の取り扱いに比べて、プラトンのより明

確な自覚的な分析を見て取ることが出来るのである。

以上のことから、我々は、初期および移行期の対話編と「ソクラテスの誤謬」との関係を、次のような形で整理して理解することが可能となる。初期対話編における、従来は「ソクラテスの誤謬」の典拠と見做されて来た様々な箇所がいずれもその明確な典拠と見做し得るものでないことが、今日では明らかにされている。⁽²¹⁾しかし、それにもかかわらず、それらの累積的な積み重ねは、それらが「ソクラテスの誤謬」を背景として語られていることを極めて強く示唆しているということも、決して否定し得るものではない。⁽²²⁾初期対話編における論駁法に構造上「ソクラテスの誤謬」の問題が内在するものであり、そのことを、方法論的意識が先鋭化する『メノン』編などの移行期の作品においてプラトンが明確に自覚したとすれば、こうした事情は極めて明確な形で理解できるものとなる。「ソクラテスの誤謬」が『メノン』編などの移行期の作品においてはじめて明確な形で定式化されている⁽²³⁾ということは、移行期の知識観が初期のそれから転換するということを意味するのではなく、むしろ逆に、移行期におけるプラトンの、論駁法の構造と意義についての洞察の成熟、深化を物語るものである。そして、このような「ソクラテスの誤謬」についての洞察の連続性と発展性は、初期においても『メノン』編においても知¹が同じ性格づけを与えられているということ

を如実に示すものである。

三

xが何であるかの知¹が、xがどのようなものであるかについての想念を含むxについてのあらゆる想念の体系化、整合化によって達成されるものである以上、『メノン』編の知識観においては、何であるかの探求と、どのようなものであるかの探求との間に強い連続性が存在することになる。

『メノン』編においてこのことを明確に示しているのが、仮設法を用いての探求の叙述である。仮設法による探求は、確かに『メノン』編においてはもととは、あるものが何であるかの知なしに、それがどのようなものであるかを探求することを可能ならしめるものとして導入されたものである (86d-e)。しかし、実際にはこの方法が徳とは何であるかの探求において極めて重要な働きをするものであることが示されている⁽²⁵⁾ということは、明らかである。この方法は、「徳は知である」ということを解明し得る (87c-89a) ものとして提示されているからである。この仮設法を用いての探求が、『メノン』編において、何であるかの知の優先性の格率に反してしまふことになるのは、それが仮設法を用いての探求であるからではない。それはむしろ、次の点に由来すると考えるべきである。すなわち、仮設法が、『メノン』編においては、何であるかの知の探求をこころざすことなしにどのようなものであるかを探求するために、用い得る手段として導入されたため、探求においては常に、何であるかということからどのようなものであるかということを説明する

ような、完成された体系が目指されるべきであることが、そこにおいて十分に自覚されず、そのために事例についての同意から混乱が生じてしまったということである。

こうした連続性²⁶と、前節までに明らかにした知¹の内実の分析は、我々を知²の内実と、知¹と知との関係についての新たな洞察へと導くことになる。

先にもふれたように、『メノン』編においてソクラテスが倫理的問題に関して知²を表明することはない。しかし、初期対話編においてソクラテスが知²を表明していると考えられる命題を、我々は『メノン』編のうちに見いだすことが出来る。一つは、徳が善きものであるという命題 (87d2-3 cf. Euthyd. 296e4-297a1, 293b7-8) であり、もう一つは、全ての人が善を求めるという主張 (78b5-6 cf. Ap. 25d9-e5) である。

これらについてまず注目すべきことは、これらが探求のための確固たる基盤となるということである。徳が善きものであるという命題は、『メノン』編において仮設法を用いての探求の際、「動かざる」同意として定立され (87d3-4)、それ以降の徳の有り方を巡る探求、徳が知であることの説明に結び付き得る探求のための、確固たる考察の出発点とされる。このことは、初期対話編での論駁法に基づく様々な議論において、徳が善きもの、美しき (立派な) ものとして定立され、それが考察のための極めて重要な転回軸となっている (e.g. Charm. 160e, 169b, Lach. 192c) ことと対応する。同様に、全ての人が善を求めるという命題も、初期対話編の様々な議論

において極めて重要な転回軸となるものである (e.g. Ap. 25d-e, Gorg. 468a, Euthyd. 278e)。この命題に関してとりわけ重要なことは、それが善が益になるという主張 (77d3-4) を出発点として形成されているということである。善が益になるということは、プラトンにとっては definitional なものであると考えられる。²⁸ 全ての人が善を求めるという命題がそこを出発点として築きあげられたものである以上、それは、一種の分析命題的な必然性を持つものであると言いうことが出来るのである。

しかし、これらの命題についてさらに注目すべきことは、それらが探求のための極めて確固とした出発点、基盤となるものであるとしても、その把握だけでは知とはなり得ないということである。もつと言えば、たとえそれらが分析命題的な必然性を持つものであり、ソクラテスがそのことを明確に自覚していて、その意味でソクラテスが確実性を伴うと言えるような「知」を持つていたとしても、それだけではソクラテスは知の所有を主張し得ないのである。

このことについての明確な示唆を、我々は『メノン』編のうちに見いだす。メノンは論駁法の吟味によって全ての人が善を求めるということを納得する (77d)。しかし、メノンはこうした真なる命題に到達した後にも、「健康、富、金銀、名誉などが善きものである」 (78c5-d1) という観念を持つため、メノンの想念のうちに重大な不整合が生じ、それが探求を頓挫させてしまうことになる (78d3-74a2)。これはまさに、『メノン』編における「理由の思考」の叙述において、真なる想念を得ているにもかかわらずそれが動き

回り逃げ去ってしまうと記述された (97e6-98a2) 状態である。プラトンは、真なる想念が逃げ去ってしまうことを説明する際、『エウチュプロン』編にも用いられた (Euthyph. 11b-e, 15b-c) ダイダロスの彫刻の比喻を提示する (97d-e) ことによって、それが、論駁法によって真なる想念と他の想念との矛盾によるアポリアが発生することを意味するものであることを、明確にしているのである。

ここで我々は、このことがメノンにとつてだけではなく、ある程度においてはソクラテスについてもあてはまるということに着目する必要がある。確かに、この命題についてのソクラテスの理解が、メノンのそれと全く同じ程度と意味において「動き回る」というわけでは決していない。ソクラテスは当然、この命題に関して、それが分析命題的な必然性を有するものであるということを了解しているであろうと考えられる。とすれば、ソクラテスは、自分の想念の内にそれと矛盾するものがあることが発覚した場合には、断固としてそれを却下するべきであることを、明確に理解しているであろう。しかし、例えば次のような事態を想定してみよう。(これは実際にソクラテスが『ラケス』編、『ヒippiアス(小)』編などにおいておちいつていると考えられる事態である。)——ソクラテスは想念群 p 、 q 、 r 、を持ち、 p が必然性を有するものであるということを把握している。 p 、 q は両立可能で p 、 r は両立可能であるが、 $q + r$ は非 p を含意する。ソクラテスは q 、 r を両方とも肯定することができないことは了解しているが、いずれを選択するべきであるかを決定し得ない。——このような場合において、たとえソクラ

テスの p に対する了解が確固としたものであったとしても、自身の想念群に属する q 、 r から非 p が帰結するという点では、事情はメノンの場合と全く同じである。それゆえ、たとえソクラテスが p について必然的確実性を洞察していたとしても、ソクラテスはその命題自体について知を主張し得ないのである。以上のことから、プラトンが『メノン』編において極めて統一性のある有機的な方法論、知識観を確立していることが理解される。—— x が何であるかの探求において、何であるかの問と、どのようなものであるかの問とは強い連続性を持ち、そこにおいて、どのようなものであるかについての了解が確固とした出发点、基盤となり得る。⁽²⁹⁾ しかし、どのようなものであるかについての確固たる了解(知)² が何であるかの探求に先立って与えられ得るにしても、それは、想念の全体が整合化され、何であるかを出発点としてどのようなものであるかなどを説明する体系が構築された場合の知(知)¹ の持つ十全性を持ち得ず、ある命題についての知を持つ者も、それについての知を指向せざるを得ない。⁽³⁰⁾ ——『メノン』編の方法論、知識観はこのような形で整理され得る。そして、まさにこのようなことの明確な把握の上に、『メノン』編における「ソクラテスの誤謬」の定式化は築き上げられているのである。⁽³¹⁾

以上のことを洞察することによって、我々は、初期および移行期の対話編でソクラテスが知を主張する命題のうちに分析的必然性を有する命題が含まれていることを、理解することが可能となる。そのような命題として、我々は、上において取りあげた「全ての人が

善を求める」という命題の他に、ソクラテスの知の表明の最も重要な典拠である『弁明』の「不正をなすこと、すなわち、神であれ人であれ自分よりすぐれている者に服従しないということが悪であり醜であるということならば私は知っている」(29b6-7)を挙げることが出来る。この命題のうちの「不正をなすこと、すなわち」を除いて考えてみるならば、これは「全ての人が善を求める」という命題に極めて近い必然性を有するものであると言えよう。すぐれた者の意見はすぐれており、誰でもがよりすぐれたものを欲するからである。⁽³³⁾ソクラテスが知を主張する命題のうちのかなりの部分がこのような性格のものであるにもかかわらず、これまでの論述により明らかにになった知の性格および知と知との関係のため、ソクラテスはこれらの命題に関して知を主張する一方で不知を主張し得たのである。

ソクラテスが知を主張する命題のうちかなりの部分が、このような性格を持つものであるとしても、そのことは、ソクラテスの知にとつて論駁法の果たす役割が低いことを意味するものではない。こうした命題の認識は論駁法によって得られるものではない。しかし、こうした命題の認識において、論駁法は重要な役割を担うと考えられる。ここで我々は、「論駁法によって得られる」認識と「論駁法を通じて(それを機縁として)」得られる認識との区別を導入したい。⁽³⁵⁾論駁法は、想念相互の論理的関係を明らかにするものである。ある人が分析的必然性を持つ命題 p と、それと矛盾する q をその想念群のうちに持つ場合、両者の論理的関係を明確に捉え

ることが p の性格の認識に極めて重要な役割を果たし得る。このような認識は、論駁法によって得られる想念体系の整合性、無矛盾性によって支えられるものではないが、論駁法を通じて得られる認識であると言えるのである。

四

最後に、以上の論からのとりわけ重要な帰結を整理して示すことによって、本論文の結びとしたい。

第一は、知の性格に関するものである。ソクラテスが知を主張する命題の全てが、分析命題的な論理的必然性を有するものであるわけではない。初期対話編のなかでソクラテスの知の表明の明確な典拠と見做し得るもののうち、そのような必然性を持たない命題として我々は以下のものを挙げることが出来る。——1、魂が悪い状態であるならば生きるに値しない(Gorg. 512b1-2)。2、善い人は正しい人であり、不正は悪、醜である(Euthyphr. 296e4-297a1, 293b7-8, Ap. 29b6-7)。3、国外追放、牢獄での拘束などはソクラテスにとつて悪いことである(Ap. 37b7-8)。——これらのうち、1は分析命題的必然性を持たないものの、当時のギリシア人にとつて極めて常識的な見解であるため、プラトンが自明性を持つものであると理解していたということは十分に考え得る。3もそれに近い形で説明を与えることが可能であるかもしれない。しかし、2は到底そのような形で説明し得るものではない。⁽³⁸⁾それにもかかわらず、本論文のこれまでの論述は、その認識が論駁法のみによって得られるも

のではないということを示している。この命題を含むソクラテスの想念群が矛盾を内含したものであり、ソクラテス自身がそのことを自覚しているからである。さらに、本論文のこれまでの論述は次のことを示す。それは、ソクラテスが、この命題以外にこれとは矛盾する命題群を持ち、この命題との間の整合化をはかるためにそのうちのどの想念を切り捨てるべきであるのかを判断し得ないにもかかわらず、この命題と矛盾する想念群の全体を受け入れることが出来ないということについて極めて確固とした了解を有しているということである。そのような確固とした了解を持たねば、ソクラテスは知を主張し得ず、対話相手に対して優位に立ち得ないのである。我々は、こうした了解をソクラテスが論駁法のみによって得ているのではないとすれば、いかして得ているのかを探る必要がある。このことについての本格的な論及は、本論文の範囲を超える。ここでは、私が、この問題は、哲学をする者が、哲学をし、知を求めるところに着目することによってのみ、解決し得るものであると考えているということだけを記しておきたい。

第二は、本論文の論述によって、初期と移行期の間で知¹、知²のそれぞれの性格づけに一貫性があることが明らかになったということである。移行期においてこの点に関して転換が見られないとすれば、そのことは、中期における、正義が善きものであることなどのことについての主張、分析が、初期対話編におけるソクラテスの考察の単なる結論だけではなく、その内実の全体を受け継いだものである

という可能性が、高いことを示唆するものである。このことに関して特に注目すべきことは、『国家』編において、「善のイデア」の認識が得られておらず、その意味において、正義の定義が完全なものとなっているわけではない (cf. Rep. 504b-505b) 段階において、正義が善きものであることが極めて断定的な形で主張されている(『国家』第四巻、九巻)ということである。⁽⁴⁰⁾ この断固とした主張が初期対話編におけるソクラテスの知²に基づく主張を継承し、その知識観を継承したものであるということは十分に考え得ることである。

以上の視点は、プラトンの初期から中期にかけての対話編を総合的な形で扱うことによって、ソクラテスの知²と不知のプラトンによる継承を考察することが、プラトン哲学の研究にとって極めて重要な課題であるということを示唆するものである。

このことを自らの今後の課題とすることをもって、本論文の締めくくりとしたい。

文 献

- 本文および注で言及したもののみ プラトンの著作は除く なお、本文ならびに注におけるプラトンの著作名の略号は慣例に従う
- Benson H. (1)——1990 “The Priority of Definition and the Socratic Elenchus” (Oxford Studies in Ancient Philosophy 8 pp. 19-65)
- Benson H. (2)——1990 “Meno, the Slave Boy and the Socratic Elenchus” (Phronesis 35 pp. 128-58)
- Beverstius J.——1987 “Does Socrates Commit the Socratic Fallacy?” (American Philosophical Quarterly 24 pp. 211-223)
- Brandwood L.——1990 The Chronology of Plato's Dialogues

- Brickhouse T. Smith N.——1994 Plato's Socrates
 Burnyeat M.——1980 "Socrates and the Jury" (Proceedings of the Aristotelian Society Suppl. 54 pp. 173-91)
 Fine G.——1992 "Inquiry in the Meno" (Kraut R. ed. 1992 The Cambridge Companion to Plato pp. 200-226)
 Irwin T.——1977 Plato's Moral Theory
 伊集院利明——一九八八「『国家』編の構造と「イデア」論」(東京大学文学部哲学研究室論集第七号 pp. 110-122)
 Kraut R.——1983 Socrates and the State
 Mackenzie M.——1988 "The Virtues of Socratic Ignorance" (Classical Quarterly 38 pp. 331-50)
 Morrison D.——1987 "On Professor Vlastos' Xenophon" (Ancient Philosophy 7 pp. 9-22)
 Nehamas A. (1)——1985 "Meno's Paradox and Socrates as a Teacher" (Oxford Studies in Ancient Philosophy 3 pp. 1-30)
 Nehamas A. (2)——1986 "Socratic Intellectualism" (Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy 2 pp. 275-316)
 Reeve C.——1989 Socrates in the Apology
 Santas G.——1979 Socrates
 Vlastos G. (1)——1994 "Socrates' Disavowal of Knowledge" (Vlastos 1994 Socratic Studies pp. 34-66)
 Vlastos G. (2)——1991 "Elenchus and Mathematics" (Vlastos 1991 Socrates pp. 107-131)
 Vlastos G. (3)——1994 "The Socratic Elenchus" (Socratic Studies pp. 1-38)
 Vlastos G. (4)——1994 "The Protagoras and the Laches" (Socratic Studies pp. 109-126)
 Vlastos G. (5)——1994 "Is the Socratic Fallacy Socratic?" (Socratic Studies pp. 67-86)
 Vlastos G. (6)——1991 "Socrates contra Socrates in Plato" (Socrates pp. 45-80)
 Woodruff P.——1986 "The Skeptical Side of Plato's Method" (Revue Internationale de Philosophie 40 pp. 22-37)

註

- (1) Vlastos (1) (初版 (Philosophical Quarterly 35 pp. 1-31) は一九八五年)
- (2) Vlastos (2) pp. 118-125
- (3) Fine, Nehamas (1) p. 16, Irwin p. 139
- (4) e.g. Irwin pp. 139, 315n. 23
- (5) Fine p. 204 など、98b の知の表明は、倫理的問題に関するものではなからず除外される。
- (6) Vlastos (1) pp. 48-58, (3)
- (7) ソクラテスが侍童を導く役割を果たしたという点に基づいて、侍童との問答と論駁法との間に断層を主張する Vlastos (2) p. 119 の論点について、それに対する Fine p. 221n. 28 の反論を参照。
- (8) contra Vlastos (2) pp. 122-125
- (9) cf. Irwin pp. 136-138 など、81c9-d1 において全ての事物の本性の連続性が主張されているという点も、プラトンが、論駁法の探求においては人の持つ想念の全体が問題となれざるを得なくなることを洞察していたことを暗示する、極めて有力な示唆である。
- (10) この点に関する私の解釈は、結論においては Kraut pp. 245-316 の解釈に近いものだが、その論拠と、個々の対話編の理解の仕方は大幅に異なる。
- (11) cf. Kraut pp. 311-316
- (12) 注目すべき点は、ここでソクラテスは自分が不知のうちにあるとだけ言っているのではなく、直前の議論によってアポリアにおちいったと言っているという点にある。
- (13) この二つの想念を、二つともソクラテス自身の想念と見做すべきであるように思われる。cf. Vlastos (4) pp. 117-124
- (14) contra Brickhouse-Smith pp. 69-71
- (15) Vlastos (3) p. 27n. 68 ヲラストスのこの理解は、彼の知¹、知の解釈を救うためには不可欠なものであるが、十分な論拠はないと思われる。
- (16) 別の言い方でヲラストスの解釈を批判するならば、ヲラストスの解釈では、知²を持つが不知である人の不知をソクラテスは暴くことが出来ない。

いことになってしまおうであろう。(この批判は、Brickhouse-Smith (pp. 30-45) をはじめとする、ヴラストス以外の多くの論者たちの解釈に対してもあてはまる。)

- (17) これが実際には「誤謬」ではないことを示すのが本論文の狙いであるが、便宜上本論文では慣例に従い、この名で言及することにした。

- (18) Burnyeat にも、こうした理解が見られる。

- (19) e.g. Vlastos(5), Brickhouse-Smith pp. 45ff., Nehamas(2) pp. 277-293

- (20) 『ラケス』編における事例の取り扱いには、191aにおいてソクラテスが事例についての明確な同意を与えていることと、196d-197cで、ほとんどの者が勇気の事例であることの同意を与える事例が勇気の事例ではないかもしれないということが問題とされていることとの関係を、どのように捉えるべきであるかということが、十分に主題化されていないという点において、よりプリミティブなものであると言える。なお、ソクラテスは192a-dにおいて、ラケスに、xの事例であるとラケスが思う様々な事例からxの定義をするようにすすめているが、そのことは、xが何であるかの想念の形成にとって何がxの事例であるかの想念が重要であることを示すにすぎない。

- (21) Beversluis, Vlastos(5), Benson(1) なお、著作年代については、私は² Vlastos(6) p. 47n. 8, Brandwoodに従い、『エウチュデモス』、『ゴルギアス』、『ヒippiアス(大)』、『リュシス』、『メネクセノス』、『メノン』を移行期の著作として扱う。この点に関しての私とヴラストスの違いは、私が、Brandwoodに従い、『ゴルギアス』が他の移行期の著作に特に先行するとうわけではないという可能性を重視することのみである。

- (22) この点については、Benson(1) esp. pp. 41-44の議論が詳細で説得的である。

- (23) Vlastos(5) esp. pp. 71, 80

- (24) contra Vlastos(2), (5)

- (25) cf. Benson(2) pp. 155-156

- (26) こうした洞察が『メノン』編に見られる以上、『メノン』編で「ソクラテスの誤謬」を定式化する際、ソクラテスが、メノンを知らない者は

メノンが美しいか富んでいるかなどがわかるはずがないという直感的事実(71b4-8)に訴えているとしても、それがソクラテスの知識観を正確に反映したものでないことは明らかである。それゆえ、71b4-8を論拠に71b3-4を「ソクラテスの誤謬」の明確な定式化とは見做し得ないとするNehamas(1) pp. 5-6, (2) pp. 280ff.の論点は成立しない。

- (27) 『弁明』のこの箇所には、善が益になるものであることについての、ソクラテスの知の表明が含意されていると言える。

- (28) cf. Santas p. 185

- (29) これに対して、初期対話編において、事例についての了解(言うまでもなく、それについてソクラテスは知を持ち得るが)がそのような確固たる出発点、基盤となることはない。

- (30) Woodruff pp. 30, 33などにも、プラトンが定義としての知を重視したがゆえに、その他のことについての了解が知への途の途中段階にすぎないと言えるということの指摘がある。しかし、解明すべき重要な点は、なぜ、どのような意味において、定義の知が重視され、優先されるのかということである。

- (31) 知を指向するということは、何であるかを出発点として説明を組み立てるような体系の構築を指向するということである。

- (32) kai (29b6) を exegetic と理解するべきであることについては、Reeve p. 110n. 6, Mackenzie p. 338

- (33) このことについてのより詳細な検討は、他の機会に期したい。

- (34) 知と知の区別を how の知と that の知の区別とする Brickhouse-Smith pp. 36-45 の解釈 (Reeve p. 52 にも同様の解釈が見られる) は、知を基本的に論駁法によって得られるものであるとしているという点においては、ヴラストスの見解と同一線上のものであると言うことが出来ると思われる。本論文で明らかにしたように、論駁法の性格上、知によっても how についての説明がある程度は与えられるということに、我々は着目する必要がある。

- (35) Vlastos(3) esp. pp. 18-19, (1) は、論駁法がソクラテスの唯一の方法であることから、ソクラテスが知る命題の全てが論駁法によって得られるとしている。私は、論駁法がソクラテスの唯一の方法であるとは考えないが、そのことを認めたとしても、ヴラストスの推論は誤りであると

考える。

(36) cf. Brickhouse-Smith p. 36

(37) Vlastos (1) pp. 40-48 がソクラテスの知の典拠として挙げている箇所のうち、『ゴルギアス』486e5-6 は、「カリクレスが A について知っているならばカリクレスは A について正しいことを言い得る」という自明性を持った命題に等しいものと理解することが出来る。『プロタゴラス』357d7-e1 は倫理的問題についてのものであるとは言えない。『クリトン』48a5-7 と『国家』351a6 b7 c7 d7 は Morrison p. 20, 10, Benson (1) p. 28 を参照。

(38) これは、まさに『ゴルギアス』編の論争点となるものであり、Morrison p. 20n. 10 の言うように自明性を持つ命題であると見なすことは不可能である。

(39) 『メノン』編には知の表明はないが、同時期の作品に知の表明が見られる。²

(40) 文献表中の拙論を参照されたい。